

学生時代の思い出

堀江保蔵

私が京大経済学部へ入ったのは大正14年(1925)である。講義は、教授自身の大きな著書を教科書にしたもの2、3を除き、すべてノート筆記方式で行なわれた。ノートブックはイギリス製のフルスキャップ4帖綴、ペン先はスペンセリアンの細書きがふつうであった。日本製のノート用紙は、インキがにじんで、使えなかったのである。そのころ、すでに、学生が提供したノートブックによって、プリントが出はじめていたが、あまり当てにならないので、やはり出席してノートを取るのが学生のもっとも大事な仕事であった。

講義をよく聞き取ろうとすれば、前の方に席を占めねばならない。朝8時からの講義など、前日の夕方に教室へ入って、座席をイヤーマークするチャッカリ者もいた。欠席すれば誰かのノートを借りて穴埋めをしなければならぬ。私の同期では、鳩居堂の現社長・熊谷直清君など、そのきれいなノートがよく目をつけられたものである。

講義の本文は右ページに書き、左ページは、説明の要点や参考書を読んで得たところを書きこんだり、講義内容を整理したりするのに利用する。

ノートの穴埋めや参考書の閲覧のために、私も時折図書館へ行った。いまにして思えば、当時すでに指定図書の設けがあって、閲覧室のカウンター横に開架で並べられていた。図書館長になって旧書庫を見廻ったとき、指定図書のラベルを貼った多数の法学・経済学関係の図書を見出して、懐しく思ったことである。その閲覧室はいまの教育学部のところにあり、木造平屋の古ぼけた建物であった。そこでギクギクと地震(昭和2年3月7日奥丹大震)に揺られた記憶が、はっきり残っている。

私たちの時代に比べると、今の学生諸君の方が、ずっとよく図書館を利用している。それに応える意味でも、附属図書館の施設・設備および機能のすみやかな近代化が、切に要望せられる。

(経済学部教授)